
クイズ・サプライズ～驚きファミリー長男の亀です～

いいくに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クイズ・サプライズ〜驚きファミリー長男の亀です〜

【Nコード】

N7689H

【作者名】

いいくに

【あらすじ】

一つのクイズ番組ないで生まれた家族…そんな家族の日常をのぞいて見ませんか？

あつども竜です

「変身!!」

「出たなライダーマン

今日が貴様の最期の日だ!!」

「行くぞ!!」

……

これがボクの唯一の代表作だった……

七年後

「マネージャーさん仕事ないですか？」

「ないよー一週間仕事なしはきついよねー」

ボクの名前は亀谷毅史（かめたに つよし）

七年前ライダーマンで一世を風靡した。

しかしライダーマンが終わってから仕事が減ってきた。
今では週六で休みだ。

「キビシくなー」

（プルルル）

マネージャーの電話がなった。

「ハイもしもし〜あつ本当ですか
ありがとうございます」

なんか嬉しそうだな…

「亀ちゃん！仕事よ！！」

……………仕事！！

「マジすか！！」

「マジよ」

女言葉を使ってるがこの人は男だ。

「やった〜」

「収録明日だから」

わかりました〜オレはずっと事務所で鼻歌うたっていた。

次の日

撮影場所の来てもセットができてなかった…

「あの〜セットがない状態で収録するんですか？」

近くにいるADさんに聞いた。

「今日はしませんよ」

収録をしない？

「じゃあ何するんですか？」

「テストします」

テスト？

「テストするんですか？」

ADさんが不思議そうな顔をして…

「この番組見たことないですか？」

「すみませんマネージャーからなんも聞いてないんで…」

「とりあえずクイズ番組なんでヨロシクお願いします」

「あっこちらこそ」

クイズ番組か…

久しぶりのテレビの仕事だ。

ガンバンぞー！！

テスト終了後

「ハイ終了です」

ADさんが終了を告げる。

お疲れ様でした〜と言って皆出て行った。

でもオレだけはずっと作りかけのセットの上に腰掛けていた

「どうかしたんですか？」

名前はわかんないけど女性のアナウンサー方が話しかけてくれた。

「いや〜久しぶりのテレビなんでちょっとした緊張ですかね？」

笑いながら答える。

「んな緊張することちゃうで！」

女子アナの後ろから声がした。

「あつ……吉伸さんよしのお!!」

この人は田中吉伸さん五本以上の自分の番組を持つ大御所。

「吉伸さんにテストってことは……………クイズ・サプライズ!!」

「今気付いたんかい」

クイズ・サプライズか…………

人気番組じゃん…………

さらに緊張するな……

「今回は特別なだけでいつもは番組収録前にやるんやで」

「…そうなんですか…」

「そんじゃオレは仕事はいつてるんで行くわ」

吉伸さんは出ていった。

「んじゃ〜ボクも行きます」

「明日はヨロシクお願いします」

「こちらこそおねがいします」

そう言ってオレはスタジオから自宅に帰った。

家についたオレはすぐに眠りについてしまった。

こうしてオレの騒がしい芸能生活が始まった。

あつども…本番前で緊張してます

今日は収録当日。

オレはマルフジTVの楽屋にいる。

張り切りすぎて早く来過ぎたな…

「暇だな…」

誰かこねえかな……

「おはようざまゝす」

のんびりした声の人が入ってきた。

「おはようございます」

「あゝ亀谷さん!!」

………?

誰?

「亀谷さんですよね?」

「そうですけど……」

あつこの人…クイズ・サプライズのレギュラーの人が…

「ライダーマン見てましたよ。
オレ、ファンなんです」

なんか照れるな…

「ありがとうございます
失礼なんですが名前聞いてもいいですか？」

「オレは山^{やまがみ}上太^{たい}一^{いち}です。
まだ二十四です。」

若いな…オレより1、2、3、4、5、……七も年下か。

あつ挨拶行かなきゃ…

「それじゃ山上君オレ挨拶行くわ」

挨拶を終えてスタジオに向かった。

「早いですね」

聞いたことある声がした。

「あつ…アナウンサーさん」

「あの私アナウンサーじゃなくて木村つていいいます」

「木村さんですね」

木村さんは笑顔で

「はいそのとおりです」

なんかホッとすんね

「あのそろそろスタンバイお願いします!!」

ADさんの声でみんながスタジオに集まって自分の席につく。

「それじゃ〜本番入りま〜す

3・2・1」

オレのクイズ・サプライズの始まりは記憶に残らないように、鮮明に残る
嬉しいような恥ずかしいようなデビュー戦だった。

あつども本番中におバカされました

「クイズ・サプライズ〜ヒットパレード〜」

（ワアアアア）

「はい始めりましたサプライズ
今回は新顔が二人来てます。
まず亀谷毅史」

オレか…

「ヨロシクお願いします〜」

みんな温かい拍手で迎えてくれた。

「コイツ元ライダーマンなんですよ」

吉伸さんの紹介でスタジオがざわめく。

「いや〜昔の話ですよ」

「そんで鶴岡健太^{つるおかけんた}」

「お願いしま〜す」

「いや〜コイツは現役東大生だからな」

東大か…

高学歴だな……

「いや〜昔の話ですよ」

「」「現役だろ!!」「」

芸人みんなに突っ込まれる鶴岡。

「いや〜鶴岡君〜腕あるね〜」

吉伸さんにも……

うらやましい……

「はいじゃあ今日の順位行くぞ」

() 内 街角予想順位

1位(7) 鶴岡健太

2位(1) 朝田久仁子

3位(4) たなかたかだ 田中勇氣

4位(2) たなかたかだ 高田孝一

5位(12) 金沢可奈

……

「はい5人残りました。またいつもの4人のメンバーです。」

オレいるんすけどんすけど…

「あら…亀谷何してんの?」

吉伸さんにいじられる…

「お前な街角予想が3位やねんな…
下位6人に入るって」

「ちょっと調子が…」

「はい14位」

「12点獲得…
里中欄さん」

14位(16) 里中欄
15位(17) 上久保直行
16位(14) レベツカ

……

「さあ二人残りました
どちらかが7点で
どちらかが3点です」

どっちも一桁か…

「なあ亀谷…」

「はい」

「ちびっ子のヒーローがこのさまでいいんか？」

「すいません悔い改めます」

かんじゃった…

「ちゃんと日本語しゃべれや

はい第17位」

「7点獲得…

山上太一さん」

「ヨッシャアアア！」

「ウソー」

オレけっこうできてたのに…

「亀谷、ヒーローが最下位はあかんぞ」

「……すいません……」

セツトチェンジ中……

「よゝ3点君」

「高田さんその呼び方やめてくださいよゝ」

高田さんとはけっこう昔から仲がいい。

「にしてもあのおバカ四天王に負けるか…」

あの四人はそんな呼ばれ方してるんだ…

「高田さんその呼び方やめてっぺ」

「おゝ里中ちゃん」

里中欄さんがオレと高田さんの間に入ってきた。

「おゝ最下位君」

「やめてよそんな呼び方」

「んじゃゝ亀兄」

「なんで兄なんですか？」

「おバカ5人組の中で一番年上だから」

おバカ5人組……？

「おバカ5人組って？」

欄さんは少し黙って

「……………四天王+亀兄……………」

オレもうおバカ扱いなのか……

「3点君大変だな」

高田さんが明るく声かけてくれる。

「3点君はやめてくださいよ」

セット準備が終わりADさんが

「皆さんスタンバイしてください」

「んじゃ次も頑張れよ
おバカさん達」

「「おバカさんってよばないでください」」

そんなこんなで収録が終わった。

亀谷さんの弟分の太一です。ヨロシク

「はいOKです」

お疲れ様でした

みんな口々に言って楽屋に戻って行く。

「んゝ緊張したゝ」

オレは緊張が解けて疲れがドツと出てきた。

いいや楽屋に戻る…

スタジオから出ようとしたところに高田さんが

「楽屋の場所わかるか3点君？」

「わかります

あとその呼び方やめてください」

「はいよゝ

にしてもバカだったなゝ珍回答の嵐なんてレギュラー確定じゃねえか？」

冗談混じりに言う高田さん。

「だったらいいんですけどね」

言葉ではそう言うがあんな恥は正直もうかきたくない。

「それじゃー高田さん失礼しますよ」

「また今度な」

楽屋に向かって歩きだした。

はぁ疲れた…

楽屋ってこんなに遠かったかな…

なんか目印は…

あっ…あつた

ここがAスタジオの通路で…

あれ？サプライズってCスタジオだよな…

…

…

…迷った。

ここどこ？

誰かに聞くか？

恥ずかしいからな…

知り合いを探そう…

5分後…

知り合いいね…

「亀谷さん!!」

子供みたいな元気な声がした……

「山上君！！」

いたよ…知り合い…

「亀谷さん楽屋の場所わかりませんか？」

………

「お前も迷ったのかよ！」

「お前もってことは亀谷さんも！」

山上君はビックリした感じだった。

「ワリィねえ山上君」

「いや、ですけど……」

山上君じゃなくて太一でいいです」

照れながら言う山上君。

「わかったよ山上君」

「わかってないじゃないですか！！」

「あっ………ゴメンね

太一」

太一を強調して言った。

「それでいんです」

「ねえ亀谷さんどうします?」

「まあなるようになるだろ」

あれから迷い続けてけっこう立った。

「どこ歩いてもここに戻ってきますね」

あきらめ半分で太一が言う。

「マジどうしよう」

「なんかしたんか?」

後ろから聞いたことのある声…

「「吉伸さん!」」

「おっきい声だすなや
うるさいの」

ちょっと怒り気味の吉伸さん。

「すみません…」

あの〜楽屋の場所がわからなくて…」

「あはははは」

笑い出す吉伸さん。

「笑い事じゃないんですよ」

「あゝ悪い悪い」

この道まっすぐ行つて突き当たりを左に行けば……

「「ありがとうございます」

それじゃ失礼します」」

「Ｃスタジオやねん……」

アイツら人の話きかんのな」

吉伸さんのおかげで……

サプライズのセットをばらしてるところについた……

「吉伸さんだましたなゝ」

太一が悔しそうに言った。

「どうしました？」

近くにいた木村さんが声をかけてくれた。

「木村さんオレらの楽屋の場所教えて」

木村さんはキョトンとして……

「いいですよ

このスタジオを出て………」

………

木村さんに道を教わり楽屋を目指す俺たち。

そのとき木村アナは………

（あの三人も初めてきたとき同じ質問してきたな………
山上さんはしないな）と思ってたら今日でしたか）

「やっとついた」

感嘆の声をだす太一。

「お疲れ太一」

「お疲れさまです亀谷さん」

やっと帰れる………

オレは楽屋のドア開けた。

（パーンパーンパーン）

「な……な…何？」

突然の音にビックリした。

「」「」「」驚きファミリーにようこそ」「」「」

………？

「どゆこと？」

「まあいいから早く行くよ」

「どこに？」

「いいから」

オレは欄さん手を引っ張られてどこかに連れてかれた。

亀谷さんの弟分の上久保直行です。

オレは今拉致られています。

「ついたついた」

オレはそのままタクシーに乘せられ居酒屋まで連れてこられた。

居酒屋に入ると一番奥の広い個室の前まで案内された。

「じゃあ入りましょうか」

欄さんがグイグイ引つ張ってオレを連れて行く。

「みんなお待ちせー!!」

「おせーよ! 欄ちゃんたち」

個室の中には芸人さんとか俳優のひとが10人くらいいた。

「はい座って座って」

「それでは主役がきたところで自己紹介してもらいましょう
亀谷君どうぞ」

オレ?

仕方なく立ち上がって

「亀谷毅史です

職業は、俳優と元ライダーマンです」

言い終わって座ると

拍手が起きた。

なんか照れくさかった。

「ねえ亀兄」

「なに欄さん」

「さん付やめて」

………なんか恥ずかしいな。

「なに欄ちゃん」

「年いくつ？」

「今年で32かな」

「意外と年いってるんだね」

意外とって……

「欄ちゃんはいくつなの？」

「25です」

若いなやつぱり…

周りの飲んでる人たちも時間が立つに連れて減ってきた。

明日仕事があるらしい……

うらやましいな……

結局残ったのは

オレ連れてきたコイツら4人とお笑いコンビ西本の西田さんだった。

「なあ亀谷

お前彼女おんの？」

「いないっすよ

西田さんは？」

「おらんよ

募集中や」

「またニシモン

恋話してる」

「ええがなレベッカ」

レベッカ？ハーフかな？

「どうも亀兄

レベッカです」

「あつども」

おっとりした子だ。

「どもも亀谷さん
かみくほなおゆき
上久保直行です」

「ヨロシク」

爽やかなヤツだな

「なあゝ亀谷ゝ今のうち結婚しといたほうがいいぞゝ
オレみたくアラフォーになって一人は寂しいからな……」

「はい肝に銘じます」

確かにな…

オレの同級生もみんな結婚してるからな…

「亀谷ゝ」

抱き付いてくる西田さん。

「ちよっ……西田さん飲み過ぎじゃないすか？」

「あゝニシモンはお酒飲めないよゝ」

レベッカからが笑いながら言う。

「西田さん飲まずにこの状態なんですか？」

「よくあるよ」

「ある」

「確かにな」

「あるね」

みんな笑いながら言う。

笑い事じゃないだろ……………

（ピリリリ）

誰かの電話がなった。

「はいもしもし」

あゝいまいく

んじゃオレ帰るわ」

西田さんはお金を置いて帰ってった。

「ねえ、絶対ニシモン彼女いるよね」

レベツカが飲みながら言う。

「いると思うよ」

欄ちゃんも笑いながら言う。

「なんて思っただよ」

「カンですか？」

太一、上久保が続いて言う。

「「女のカンかな」」

「「……………」」

二人とも言葉を失った。

「……………んふ……………」
あはははは！！」

オレは思わず笑ってしまった。

「なんで笑うんですか？」

「あははゴメンゴメン……………」

なんかこの人たち楽しい。

クイズは嫌だけど…

この人たちとは一緒にいないな……………

三十分後……………

「そろそろ帰りますよ」

寝てる欄ちゃんと太一に声をかける上久保。

「ん〜ん〜」

「太一君〜」

欄ちゃん〜」

「大変だね〜上久保君〜」

オレは笑いながら上久保に言う。

「みてないで手伝ってくださいよ〜」

「頑張りなよ〜」

「上ちゃんガンバ〜」

レベッカとオレが応援する。

「ん〜トイレ……………」

「はいはい連れてくから立ってね〜」

「うん〜」

上久保は太一を引きずって連れて行く。

「欄ちゃん大丈夫〜?」

「大丈夫……………」

見るからに大丈夫じゃないな……

「私タクシーに連絡するから亀兄は欄ちゃん見てて」

レベツカは電話しに外に出た。

「……………ふう……」

レベツカはお酒強いな……

上久保はほとんど飲んでなかったけど……

欄ちゃんと太一は飲み過ぎ……

「ん〜!……………」

欄ちゃんが苦しそうだ……

「どうした?」

「気持ち悪い……………」

「気持ち悪い?吐きそう?」

黙ってうなずく欄ちゃん。

「……………行くぞ……」

お姫様抱っこで欄ちゃん持って行く。

トイレにつくと先にきてたはずの太一たちがいなかった。
アイツらどこ行っただろう？

「もう……だめ……」

欄ちゃんの降ろして洗面所に顔近付けさせる。

・おうとシーンはカットします・

「大丈夫？」

「大丈夫です」

トイレからさっきの個室に向かっていた。

欄ちゃんは足がふらついている……

「歩きにくそうだけど……」

「大丈夫で………！」

「危ないよ……」

欄ちゃんはバランスを崩してオレにもたれ掛かってきた。

「そうですね……もう歩けませんね」

「乗って」

欄ちゃんに背中を差し出した。

「すみませんね」

「いえいえ」

ちゃんと背中に乗せて…

「行くか…」

「あつ亀谷さん
こっちです」

太一が手をふって迎えにきてくれた。

「行きましょう
もうタクシーきましたよ」

「ああ行こうぜ」

タクシーに乗った後
レベツカは欄ちゃん家に止まるらしく
任せることにした。

今タクシーの中は男三人。

「サプライズにボクまた呼ばれるかな？」

「亀谷さんなら呼ばれるんじゃないすか」

太一が笑いながら言う。

「おバカ5人組ですし……」

上久保は苦笑いしながら。

「……5人組か……」

「お前ら明日仕事は？」

太一は真面目な顔で

「わからないっす」

「ぼくもです」

わからないって……

「明日朝からあるかも知れないわけだろ？」

「それはないです」「」

この二人息ぴったりだな……

「あつすいません止めてください
んじゃオレ帰ります

バイ」

太一はタクシーから降りた。

「なあ上久保君」

「そんな堅苦しい言い方やめてくださいよ」

.....。

「亀谷さん？」

「.....ZZZ」

（寝ちゃったんですか）

「運転手さん止めてください
おります」

「ったく手間のかかるお兄ちゃんですね...」

（今日は泊めよう）

「んん」

（まあいつか...）

こうして久し振りのテレビは終わって行った。

たなかたかだの高田です「ワァー!!きたー!!」

「ん〜よく寝……………」

「ぼくの家ですよ」

「直行!!」

直行ん家…?
どゆことだ?

「昨日タクシーで寝ちゃいましたから」

ああ〜寝ちゃたんだオレ……

「ワリイな直行……」

「別にかまいませんよ」

爽やかなヤツだな〜

「そういえば亀谷さんぼくのこと直行って」

「なんかそうよんだぼうがいいかな〜と思って……オレたちファミリ
ーなんだろ」

「そうですね!」

コイツの笑顔爽やかだな〜

「ありがとうな直行
オレ帰るよ」

「はいじゃあ気をつけて」

「んじやな」

オレがファミリーか…

そんなことを考えてると自然と顔がにやけてくる。

「んゝ散歩でもするかな」

オレは家に帰るのをやめて適当にブラブラすることにした。

「いい天気だ」

あまりいい天気すぎて一人でいるのがもったいない気がする…

「誰か誘おうかな…」

いや…いつかめんどくさいし…

近くのベンチに腰を降ろした。

「マジでいい天気だ…」

ボーッと景色を眺めていた。

「ワリイ遅くなった…」

向こう側で聞いたことある声がした。

「いゝよそんな待つてないし」

女の人の声もする…

「ほんなら行こか」

………西田さんだ………
彼女かな？

にしては若いかな…

西田さんとその女性はどこかに行ってしまった。

今度聞いてみよう。

「何してんすか？」

後ろから声がした。

「ん？」

太一がスタッフと一緒にたっていた。

「お前こそ何してんの？」

「企画で芸能人のお宅を訪ねてるんです」

へ〜仕事か〜

「ちなみに今カメラもまわってます」

「マジで!!」

え〜ど〜もよい子のみんな〜元ライダーマンの亀谷お兄さんだよ」

カメラに向かって喋るオレ。

「何してんすか!」

「自己紹介を…」

「いらないですよ!」

「ここであつたのも何かの縁だしオレも行くよ」

「えっ行くんですか?」

「行きますよ」

「おけーですか
スタッフさん」

手で丸をつくるプロデューサー。

「んじゃ行きましょう」

歩き始める太一。

オレ後からついて行く。

「なあ太一どこ行くんだ」

「行けばわかります

亀谷さんも知ってる人の家です」

オレの知ってる人……

「つきましたよ」

えっここって……

「直行ん家じゃん!!」

「そうですよ」

今日は亀谷さんといっしょにおバカ俳優の上久保直行くん家に来ました。

拍手!」

（パチパチ）

「んじゃ早速ピンポーン」

（ピンポーン）

「はい……太一に亀谷さん？」

素で困惑してる直行。

「直行テレビテレビ！」

「あつども俳優の上久保直行です。みんな見てる」

カメラに向かって喋る直行。

オレと同じことしてるし…

「何してんだよ！」

亀谷さんと同じことしてるし！」

そんなカンジで撮影は進んで行った。

あゝ撮影も終わり家に帰ると三時だった。

「なんか疲れたな」

（プルルル）

電話か……

「はいもしもし」

「亀谷ちゃん」

マネージャーか…

「なんですか……？」

「元気ないじゃない？」

この人はいつも元気だな……

「何なんですか……？」

「あゝ仕事よ仕事」

……仕事！

「何の仕事ですか！？」

「いきなり元気なつて厳禁ね」

いいから教えてくれよ……

「え〜とね〜クイズ・サプライズだったかな…」

「あの番組か…」

嬉しいけど……複雑だな……

「後ね〜いつもの通販番組のやつね」

通販ね……

「わかりました〜」

「日付は今度事務所きたとき教えるから」

「それじゃ

失礼しま〜す」

サプライズか〜

楽しみなのかな………

ニシモトの西田です「顔が大きいからや！」

あれから二週間が過ぎた。

今日はサプライズにオレが初登場した回の放送日だ。

「よう3点君」

「高田さんその呼び方やめてください」

「ええやんけ」

「イヤです」

「つたくこの人は……」

あれ西田さんだ…

「西田さん！」

「なんや亀谷？」

喋りながらこっちに向かってくる。

「この前女の人と一緒にいましたよね？」

「ホンマかニシモン」

「いや～いや～見間違いでしょ～」

西田さんがちよつと焦てる…

「そうですかね…

まあいんですけどね

でもその女の人どこかでみたことあつたんですよ」

「……オレは知らんけどね……」

「いやゝすみませんでした」

絶対あれ西田さんだ…

知らん振りしてるけど……

こんなカンジでサプライズの収録が始まった。

「皆さんスタンバイお願いします」

ADさんの声でみんながスタンバイしている。
一人を除いて……

「西田さん準備しましょうよ」

「皆さんすいません

一人が仕事の都合で遅れてくるんです」

みんながスタンバイ場所で周りと雑談している。

「ニシモンさんなんですすぐスタンバイしないんですか」

若手芸人に聞かせる。

「いやゝすまんすまん」

笑いながら謝る西田さん。

なんかあるな……

三十分後……

「すいません！！遅れましたー！！」

遅れてた一人がやっときた……

つて……あの人……

「それじゃ撮影入りまゝす

3

2

1
」

「クイズ・サプライズゝヒットパレードゝ

」

（ワアアアア）

「今日は新入りが来てます」

「まじっすか？」

芸人さん達が立ち上がる。

「噂によるとよほどの“バカ”だそうです」

バカを強めに言う。

「では順位発表」

1位……

……

……

……

……

……

……

第16位7点亀谷毅史。

「ヨッシャー！」

「おいバカ兄弟の長男」

「バカ兄弟ってオレのことですか？」

「他に誰がいんねん

亀谷毅史

山上太一

上久保直行

の3人でバカ兄弟や」

兄弟か…

「悪い気しませんね」

「何いっとんねん」

オレはネームプレートもらって雛段式の席についた。

西田さんの様子がやっぱりおかしい気がする。

「なあレベツカいつになったら点数取れんねん？」

「いつでしょ」

おっとりしたカンジで答える。

「そんでお前や…

噂以上やな……」

「マジっすか!？」

「マジやで」

「いや手応えちょくあつたんすよ」

なんか今時なカンジの子だ…

「第17位」

4点獲得レベッカさん。

「やった〜」

「やったやないがな」

レベッカはオレの隣に座り

「やったよ亀兄勝ったよ」

嬉しそうだな…

「おめでとう」

「ありがとう」

笑顔で返してくる。

「なあお前さ〜どうすんねん」

「どうしましょ」

「2点やで」

「2点って」

雛段のみんながざわつく。

「まあええわ

頑張っ*て*いきろよ」

「はい頑張っ*て*生きます」

そのまま彼女は雛段に上らずカメラに向かって

「ど*う*もモデルの岩下雪で*す*ちや*り*ス」

「いいからはよ行けや」

「は*う*い」

やっぱり西田さんの様子がおかしい。
たぶん女が関係ある気がするな……

西田さんはいつもと違う雰囲気の中、収録は進んでいった。

「みなさんお疲れ様でした」

おつかれさま

みんな口々に言ってスタジオから出て行く。

「岩下また来るんやで」

収録の間ずっと珍回答だったからな…

「また強力なやつが来たで」

嬉しそうに言う吉伸さん。

その間も西田さんは黙ったままだ。

「ニシモンさんどうしたんすか？」

若手の芸人さんたちが聞く。

「なんでもないわ…」

そのままスタジオから出ていった。

「やっぱなんかおかしいよなあ」亀谷……いねえし！」

オレは西田さんを追いかけていた。

ニシモトの楽屋の前……

西田さんはもう楽屋にいるみたいだ。

ドアをノックしようとしたとき…

「今はやめとけよ」

オレを止めたのは相方の井本さんだった。

「今はやめとけ」

「何でなんすか？」

「いいから…」

なんか複雑な顔をしてる……

「わかりました
また今度にします」

「すまん…」

「大丈夫ですよ」

オレは自分の楽屋に戻っていった。

そしてオレの初登場の回は珍回答だらけで大反響があったらしい…
…

「ニシモトの井本です」「普通のことを普通のこえでいいです」

亀谷が訪ねようとした西田さんが楽屋の中では……

「ねえ何でシカトすんの？」

「してへんがな」

どうやら喧嘩中のような……

「いつもあの番組に出てるカンジと違うじゃん」

「変わってへんよ」

「絶対変わってる！」

楽屋の外では……

井本が……

「早く終わらんかな」

「……してへんがな!!」

部屋から声が聞こえる…

「はぁ……まだ続きそうだな……」

「……だから!!」

また大きい声出して……

亀谷も行っちゃうしよ…

どうしようっかな

着替えもできないし…

(ドン)

ものまで投げんのか…

「おいそれ井本の……」

オレのもの投げんなよ!!……

どうしよう……

「何してんねん？」

「吉伸さん!!」

すいませんが中で喧嘩してるやつら止めてくれませんか？」

「いいんやけど…誰が喧嘩してんねん？」

……言いにくいけど……

「入ればわかります」

「そうか……」

ほな止めて来るわ」

そう言つて吉伸さん楽屋に入つていった。

十分後……

「井本ちよつとこい」

吉伸さんに呼ばれ楽屋に入る。

「いつから知つてた？」

「何をですか？」

「今さら知らん振りはないだろ
西田と雪のことだ……」

「一カ月くらい前ですかね……
ビックリしましたよ……」

従兄弟なんて」

「……………従兄弟？」

不思議そうな顔をする吉伸さん。

「違うんですか？」

「そやな従兄弟やな…」

お前がいきなり系コン言うから」

「言っていないですよ」

吉伸さんの顔が引きつってる。

「まあええや井本荷物持って帰れ
オレはコイツに話がある」

オレは楽屋から追い出された。

従兄弟同士で喧嘩とか仲が良いんだな。

新しいことの始まり

最近サプライズ以外の仕事が増えて来た。

でも、本職の俳優ではなくクイズ番組などのバラエティばかりだ……

「亀谷ちゃん頑張ってね」

「頑張るってボクはただ立ってるだけでしょ」

「まあ頑張るのよ」

「頑張りますけど……」

今はバラエティ番組の収録前…

オレの役はただ立って問題文を持つっていうMCのサポート役だ。

でも次はサプライズだし頑張ろう……

「はいお疲れ様です」

A Dさんの声でオレは急いで次の現場に向かった。

「あつ 亀谷さん」

「なんでしょう?」

「あの次の収録のこと何ですけど……」

「はい……」

早く行きたいのに……

「こんなカンジで行きますんで……」

「わかりました
失礼します」

オレはサプライズの収録に急いだ……

「亀谷ちゃん!
どこ行くの?」

マネージャーがオレを止める。

「サプライズ収録です!」

「あら私より先に行くなんて珍しいわね」

「いいじゃないですか
たまには」

「まあ気をつけてね」

結局予定よりちょっと遅れてしまった。

サプライズの収録があるスタジオについた。

「遅かったね〜亀兄」

レベッカのおっとりした声。

「いや〜マネージャーに止められちゃって…」

「亀谷さん久しぶり〜」

太一の元気過ぎる声。

「久しぶりのサプライズですよ〜ぼく」

直行の爽やかな声。

「亀兄〜新しいファミリーだよ」

欄ちゃんの聞けば落ち着く声。

「雪のこと？」

「よくわかったね」

「亀谷さんチャリス」

「おゝ雪ゝチャリス」

「（（（なんか二人ともホントに兄弟みたい）））（（（

「よゝおバカ六兄弟」

高田さんが明るく声をかけてくれる。

「やめてくださいよ
その呼び方」

「そういえばおバカ六兄弟そろいの初めてやな」

「その呼び方やめてくださいよ」

欄ちゃんは高田さんを笑いながら叩く。

「そういえばそうだな
いつも一人二人欠けてたし」

太一は感心する。

「なんか不思議なカンジっすね」

雪は嬉しそうだ。

「そろそろスタンバイお願いします!!」

みんなスタンバイを始める。

久し振りだからな

緊張すんな

おバカ6兄弟長女の里中欄です。カントリーガールズです。

「本番入りまゝす

3

2

1
……」

「クイズ・サプライズ〜ヒットパレード〜」

（ワアアアアア）

「え〜今日はついに……あのおバカ6兄弟が全員そろいました」

オレたちのことだよな……

「この6人がそろって事は放送事故やで」

「そんなことないですよ!」

「そうですよ!」

オレたちが否定するなか周りの共演者たちは、確かにな〜とうなづいていた。

これは目にも物を見せないと…

「それでは順位発表」

第一位……

……
……
……
……
……
……
第12位
14点獲得……
佐藤中さん

「結局お前らが残つとるやないか……ったく……
そんなお前らに悲しいお知らせがあります」

残つとるやつに二桁はいません」

お客さんがガヤガヤし始める。

「はい第13位」

「7点獲得……三人いらっしやいます
亀谷毅史さん」

「ヨシヤア！」

「ヨシヤア！ちやうわー！」

「続いて里中欄ちゃん」

「やったー！」

「3人目は……
レベツカさん」

「そして残り3人のうち
2人が1点です」

それはやばすぎるだろ……

「第16位5点獲得……
上久保直行さん」

「よし!!」

ガッツポーズの直行。
落ち込む太一と雪。

こんなカンジで賑やかに進んで行った。

そして……あるニュースがオレたちファミリーを驚かせた……

九月末……

サプライズのおかげでテレビの仕事が増えて来た。

そして今は久しぶりの完全に休みの日……

(プルルル)

電話……

「ハイもしもし」

「もし亀兄？」

雪だ……

「そうだけど？」

「どうしたらいいの……」

……いつものカンジじゃない……

「雪何かしたのか？」

「……………」

返事がこない……

「雪？」

「…………… 亀兄…………… 会いたい……………」

会いたいつて俺たちお互いの家知らねえし…

「…………… わかった…

十時にカジテレビ前にな…

あそこなら怪しまれないだろ…」

「わかった…」

「それじゃ」

電話を切るとオレはすぐにカジテレビを目指した。

九時半…

カジテレビ前…

カジテレビについたけど…雪はいないな…
まあまだ九時半だし…

「亀兄？」

隣にいた女の人に声をかけられた…

「ハイ？……もしかして雪？」

黙ってうなずく雪。

気付かなかった…

「んで何したのさ？」

うつむいて答えない雪。

周りからみればオレがいぢめてるみたいに見えてるだろう。

「まあいいや

とりあえず場所変えよう」

オレたちは、駅に向かって歩き出した。

電車に乗ってオレの家に向かった。

念のため別の号車に乗った。

オレは目の前にいる人をみたことある気がした。

「……西田さん？」

「あっ！」

機嫌が悪そうだ…

「おはようございます」

「なんだ亀谷かいな」

やつは最近西田さんおかしいな……

「なんかしたんですか？」

「なんかつてなんや？」

「いや、最近様子がおかしいから」

「やかましいわ！

ちっ！」

舌打ちまで大きい。

「変なこと聞いてすみませんでした
じゃあオレおりますから」

オレは電車を降りた。

………雪どこ行つたろ？………

辺りを見回したが雪がない……

ヤバいはぐれた……

亀兄から降りる駅聞いてなかった。
聞きに行こう。

∴
∴
∴
∴

亀兄が見つからない…

マジでヤバくないはぐれた……

どうしよう…

∴

∴

∴！！

「えっ……」

……痴漢！

知らない人にお尻触られてる……

怖い…

声が出ない…

誰か……

助けて…

そのころ亀谷は…

「雪に電話……………」

番号知らねえんだ……………」

メール……………」

アド知らねえし……………」

あゝどうしよう!」

レベッカで……す。……に……ち……わ……

どこ行っただよ……

雪……

はぐれちゃった……

早く見つけないと……

怖い……

亀兄……

欄ちゃん……

レベッカ……

直行……

吉伸さん……

みんな……

……

誰でもいいから助けて……

……ニシモン……

「おいオツさん何してんねん？」

「えっいや……」

「ちょっと降りてもらえます？」

誰………？

「君も一緒に降りてくれる？」

助けてくれた人に優しい声で聞かれる。

「ほら降りんぞ」

もう一人の人は声が怖い。

私は助けられた……

今は駅のベンチに座っている。

なんか体中の力が抜けるようなカンジだった……

「雪大丈夫？」

「あっハイ……」

この人の声って……

「……太一！？」

「今ごろかよ！」

「太一が助けてくれたんだ……」

なんかホツとしたけど……寂しい……

「いや……オレだけじゃないんだけど……」

「えっ？」

「お前の隣にいるオレは無視か！」

「……ニシモン！？」

「今気付くんかい！」

あの怖い声はニシモンか……

「ゴメン……」

「まあええわ……
んじゃ行くわ……」

私の髪をグジャっとして立ち上がりながら

「まあ雪が無事でよかった」

ささやいた……

「ありがとう……」

ニシモンはそのまま駅から出て行った。

……なんだ私は……勝手に勘違いしてみたい……

「雪……いた……!」

亀兄が走りながら大きい声を出す。

「どこ行つてんだよ」

「亀兄が降りる駅言わないからでしょ」

「……ごめんなさい」

「それでよし!

それじゃ雪帰るから……」

「えっ……話があんじゃ……」

戸惑った顔で聞く亀兄。

「じゃねえ

太一に亀兄」

「なあ太一なにがあつたの？」

「言いません！
それじゃ」

「なにがあつたの………」

ちゃリース!!岩下雪で〜す一応一番年下かな…

「亀ちゃ〜ん新しい仕事よ〜」

「なんの仕事ですか?」

「歌がどうのこうのってやつよ」

ちゃんと覚えようよ……

「分かりました〜」

「再来週だから〜用意しといて〜」

収録当日……

(コンコン)

「亀谷さん失礼しま〜す」

「ハイ」

スタッフさんが入って来た。

「なんですか?」

「今日歌こちらでいいですよね?」

「ああ…はい」

この前マネージャーにかつてきめられたんだけど……

(これ歌えば多分おバカイメージに返上できるわよ)

んなこと言っ たって…

「それじゃあ頑張ってください
失礼しまゝす」

「……………」

楽屋に挨拶行こう…

(コンコン)

「失礼します

今日はヨロシクお願いします」

「おゝ頑張れよおバカさん」

「おバカさんはやめてくださいよ」

……

……

……

楽屋を周って残りは芸人さん達の楽屋と女性陣の楽屋だ……

(コンコン)

「失礼し……」

「亀ちゃんじゃん」

「西田さん！」

そう言えばニシモトさんこの番組の常連だっけ…

「今日はヨロシクお願いします」

「何おバカなやつがかしこまってんだよ」

井本さんが言う。

「まあがんばろぜ」

「はい」

…

…

…

「失礼します

今日はよろしくお願いします」

「頑張ってください」
亀兄」

「レベッカもなんだ」

「私は審査員です」

「あっそうなんだ」

「そろそろスタンバイお願いします」

ADさんの声でみんなスタジオに向かった。

「亀兄行こう」

「ああ」

オレはレベッカと一緒にスタジオへ向かった。

「「芸能人歌うま王者決定戦」」

「さあ始まりました“歌うま王者決定戦”」

ビーフシチューさんが進めて行く。

「今日はおバカ俳優が来ていると言つことで」

「誰がおバカ俳優なんですか！」

オレは前にでた。

「出て来るってことは自覚あるんじゃないの？」

「ないこともなくはないです」

「ややこしいな！」

「すみません」

「それじゃーまず一回戦第一試合を始めます」

∴

∴

∴

「第五試合なんですけども……

ついにおバカが来ました！」

「だからおバカはやめましょうよ」

ビーフシチューさんは笑いながら

「では問題です……」

問題って…

「0から10を全てかけた場合いくらでしょう」

0からだから…

…
…
…！

「わかった！！」

「答えをどうぞ！！」

オレはカメラに向かって指を差しながら

「100！！」

(……………)

スタジオ全体が静まる。

「ブーツ！はずれ」

「えっ！！」

自信あつたのに……

「やっぱりおバカでしたね」

「もう歌で汚名挽回するしかないですね」

「名誉を挽回してくださいね」

「対戦相手はニシモト」

「もう亀谷おもしろすぎるでしょ!!」

「ホントに俺たち滑りますよ」

ニシモトさん二人で息のあったコメント。

「じゃあ歌に行きましょう
亀谷は？」

「斉藤正義さんの
歩いて帰る
です」

「続いてニシモトは？」

「ろれみれめんの
大雪
を」

「それじゃ第五試合スタート!!!!」

亀兄って歌うまいのかな？
歌ったとこ見たことないけど…
カラオケ誘ってもいつも断るし……

（ジャジャジャーン）

始まった〜
心配だな……

…
…
…
…

みんな啞然としていた……

……スゴい……

いつもの亀兄じゃないみたい……

………

(ジャーン)

「ありがとうございます」

「いやゝ亀谷君うまいじゃない!!」

ニシモトは今回も西田が足引っ張ったねえゝ」

「そんなことないでしょ」

「はい負けました！」

「まだ早いわ!!」

ニシモトさんが二人で笑いをとる。

「それじゃー審査員の方々に…

あれ？

レベツカ泣いてんの？」

私は泣いてた…

「いや……亀谷さんがうますぎて…」

なんか泣いてるけど、泣いてないみたい…

「あゝ結果見えましたけど審査員の方々
得点をどうぞ!!」

「あゝ疲れた…」

収録長かつたゝゝ

「亀兄お疲れ様」

廊下で体を伸ばしてるオレに声をかけるレベツカ。

「惜しかったね」

「まあ……」

楽しかったからいんだけどね……」

そつ…オレは決勝で負けちゃった……

「そんじゃ～オレ帰るわ…」

お疲れ様～」

「それじゃ～ね」

歌うのはいいけど…疲れるぜ……

「亀谷歌うまいやな～」

「西田さん……！」

「気いつけて帰れよ」

「子供じゃないんですよ」

そつ言つてオレは楽屋に入った。

「疲れた～」

（プルプル）

「誰だろう？」

(ピッ)

「もしもし……」

「もしもし亀兄？」

欄ちゃんだ……

「どうしたの？」

「今から飲み行きませんか？」

飲みに？

「いいけど……」

「今どこにいます？」

「カジテレビにいるけど……」

「あゝ意外と近くですね

今からこれから来れます？」

「今から飲むの？」

まだ四時だよ……

「まさか飲みませんよ」

「…だよね……」

でどこに行けばいいの？」

「カジテレビにいてください」

「はいよ」

それじゃ」

（ピッ）

欄ちゃんと飲むのはあの時以来だな……

……

飲みすぎなきゃいいけど……

吉伸や…「おバカでもええ奴等やねん」

……こない……

もうそろそろ五時になるのにこない……

（プルルル）

欄ちゃんからか…

（ピッ）

「もしもし」

「あゝ亀兄今どこ？」

「カジテレビにいるんだけど……」

自分で言っというて……

「私もいるんだけど……」

「ぼく表にいるけど……」

「私も……だけ……

あっ！！

ゴメン！！TBAの間違いだ！！」

TBA……！

「間違いすぎだろ！」

「ゴメンなさい……」

「まあ今から行くよ……
ちよっと待ってて……」

……

「ったくも」

今TBAについた……

「いない……」

「亀兄！
こっち！」

よかった……いた……

「すみませんでした」

すまなそうな欄ちゃん。
なんか可愛い……

「……亀兄？」

「ん……ああ

とりあえず行こうよ」

「…そうですね…
こちらの方です」

オレは欄ちゃんについてった。

「……………」

「……………」

会話がない。

気まずい……………」

なんか話さなきゃ……………」

「あの…亀兄この前はありがとうございました」

欄ちゃんがオレより先に話しかけて来た。

……………」あのときの飲み過ぎのことかな……………」

「そんなお礼を言われるほどのことはしてないよ」

「そんなことないですよ
ありがとうございます」

「ははは……………」
照れるな」

欄ちゃんに言われて多分オレは顔が真っ赤だろう……………」

「……………」

「……………」

…

…

…

…

…

結局会話はなくなった…

はぁ 気まずいな……

「おまたせ」

「遅いよ、欄ちゃん」

笑顔で言うレベッカ。

「まあ来たからよかったですけど」

「そうだよ」

直行、雪が続けて言う。

「雪も遅かったけどな」

「ちよっ…言わなくていいでしょ！」

太一が雪をからかう。

「まあやめて二人とも」

「全員そろったし入りましようよ」

欄ちゃんと直行はしっかりしてんな

「んじゃ行こうぜ」

オレがみんなに声かける。

「亀兄が仕切るの」

雪が言う。

「いいだろ一番年上だし」

「年下見たいですけどね」

「太一！」

みんなにからかわれる。
こんなカンジも楽しかった。

店の中に入ると高田さんとニシモトの二人がいた。

「遅いぞ」

「ホンマに」

「まあまあ二人とも」

3人が酒を飲みながら笑ってる。

「すいませ〜ん

亀兄が…」

「ぼくのせいだよ!」

欄ちゃんはさりげなく人のせいにする。

「どうでもいいけど飲もうや」

高田さんの一言でみんなが座って注文を決める。

しばらくすると店員がビールやお酒を持って来た。

「……………カンパ〜イ!」

みんなでグラスをぶつけあう。

「そういえば亀谷お前歌うまいな」

突然井本さんに言われる。

そういえば…収録いたな……

「うまかったねー亀兄」

「そんなことないですよ」

照れるオレ。

「亀兄がうまいなんて意外だなあ直行」

「そうですね」

「雪も意外！」

「私も」

みんなからそう見られてたとはショックかも……

亀谷です。酔っ払いは大変ですね。

午後１１時……

あれからずっと飲んでいた。

高田さんと井本さんは明日仕事があるらしく帰った。

西田さんは

「あいつピンの仕事もらいやがって
とひがんいた。」

「レベツカつてお酒強いんだね」

直行はレベツカ話していた。

あつちはいいか…

問題は…この二人だな……

「あゝ飲み過ぎちゃったゝ」

「私も」

太一と欄ちゃんはダウンしていた。

「またか」

「前も飲み過ぎてたろ」

オレは二人に言った。

「ゴメ〜ン」

「ゴメンなしゃい」

太一は聞いてないし…

欄ちゃんに関しては呂律が回ってない。

「雪は大丈夫か？」

「大丈夫だよ」

ほとんど飲んでなかったからな……

「西田さんは？」

「オレは飲めへんもん」

「そうでしたね」

じゃあコイツらだけか。

「あ〜……気持ち悪い……」

「オレも……」

この前みたいなカンジだな。

「ニシモ〜ン飲もうよ〜」

「飲めへんって」

あつちあつちでは大変そうだね……

「気持ち悪い……」

「水……」

「持って来るから待ってて」

オレは水を取りに行った。

「あゝ……飲みすぎた……」

また飲み過ぎちゃった……

この前もだっけ……

あの時は亀兄に迷惑かけたなゝ

「はいお水」

いきなり声をかけられてビックリした。

「あ……ありがとうございます」

亀兄が私に水を渡す。

「太一大丈夫か？」

「全然……」

太一は完全に酔いつぶれてるみたいだ……

「欄ちゃんは大丈夫そうだね」

亀兄の優しい笑顔。

なんか可愛い……

「……どうしたの？」

「い……いや何でもないですよ」

多分私は顔が真っ赤だろう。

「相当酔ってるね顔真っ赤だよ」

「そ……そんなことないでしょ」

「そうかな……」

ちよつと酔いが覚めて来た。

「亀に……」

「飲むくらいいいじゃん!!」

「だから飲めへんねん!!」

二人の声に私の声は書き消された。

「二人ともやめなよ」

止めに入る亀兄。

「ふん」

「ふん」

はゝあの二人は……

なんか仲良すぎない？

気のせいじゃないと思う。

三十後半と二十前半がケンカかよ……

「西田さんそんな怒鳴ることないでしょ」

「しつこいからやんけ」

「だからって……」

「もうええわ帰る

金は置いてくわ」

帰ろうとする西田さん。

「待つてよ」

「……………」

雪の言葉を無視する西田さん。

そのまま西田さんは店を出って行った。

西田さん出て行った後はみんな解散することになったが……

「まあ雪…明日には西田さんも忘れてるよ」

「あいつが忘れても雪が忘れないもん」

強気な子だな……

「まあいいや……」

とりあえずコイツらどうしよう……」

みんな寝ちゃったし……

「雪コイツら運ぶの手伝……」

「……………」

雪も寝ちゃった……

「結局ぼくか……」

店員さんにも手伝ってもらって
全員タクシーに乗せた。

「え」と……」

誰から送ればいんだよ……

家知らないし……

直行の家は……

どこだったけ……

オレん家でいいか。

オレは運転手に住所を告げて走ってもらった……

アナウンサーの木村です。最近出番少ないですね。

「亀兄……」

誰かに呼ばれた気がした。

みんな寝てるし気のせいか……

「いや、芸能人を乗せるの初めてなんで緊張しますね」

運転手さんが言う。

「そうなんですか」

運転手さんはニヤ、と笑って

「どついつ集まりなんですか？」

「いや、何て言ったらいいか……」

オレはここまでにくる経緯を話した。

「あ、大変ですね」

笑いながら運転手さんは言う。

「まあいいんですけどね」

「はいつきましたよ」

オレン家についたが……みんな起きる気配がない。

「運転手さん…すみませんけど手伝ってもらえませんか？」

「何をですか？」

不思議そうな顔する運転手さん。

…

…

…

…

…

「じつゆつことですか…」

「すみません」

オレン家の玄関の前まで寝てるみんなを運んでもらう。

「ありがとうございます」

「いや〜いい思い出ができました」

ニヤ〜と笑って車に戻って行った。

さて、どうするか……

女の子はベッドでいつか……

3人も寝れるかな……

男どもは布団だな……

あつ……

オレ寝る場所ねえや……

まあいいか……

ベッドにギリギリ3人寝れた。

一つの布団に直行、太一が寝せる。

太一は寝相が悪い……

オレも寝よ……

そっかゝ布団ないわ……

地べたでいいか……

「吉伸さんマジでやるんですか？」

「当たり前やないか」

「でも……」

「大丈夫やって!!」

吉伸の計画は進んでいた。

たなかたかだの田中です。「相方よりかはおもしろいっすよ」

明日起きると知らない部屋にいた。

なんで直行が隣にいるんだ？

誘拐？

亀谷さんが倒れてる……

明日起きたら知らない部屋にいた。

レベッカと雪が隣で寝ている。

どこ此処？

「直行起きろ！」

「ん……なんで太ちゃんがいの？
ここどこ？」

ボクは訳がわからなかった……

向こう亀谷さんが倒れてる……

「……………ツカ」

雪

起きて」

「うーん……………おはようございます……………」

「どこどこ？」

私…どこ……

「欄ちゃんなんているの？」

「わかんないよ……」

私には訳がわからなかった……

「雪ちゃん
起きて〜」

「な……に……」

いきなりレベッカに声かけてビックリした。

それ以上にビックリしたのは

「どこどこ？」

「どこだろ〜ね〜？」

「のんびり言う状況じゃないでしょ」

レベッカに欄ちゃんが言う。

「ってかなんでベッドなの？」

雪は不思議に思った。

誰かが寝せたってことだ……

誰が？

亀谷さんが倒れてる……

太ちゃんは年下だしボクがしっかりしないと……

「ボク亀谷さんの様子見て来ます」

亀谷さんに近付こうとしたとき……

（ガチャ）

「太一いるじゃん
直行も」

雪ちゃんを先頭に女の子が入って来た。

「亀兄はいないんだ……」

欄ちゃんが言う。

「あそこに……いるけど……」

直行が指す方向には
亀兄が倒れてる……
なんで……

「亀兄大丈夫？」

私は亀兄に駆け寄った。

「……………」

返事がない。

「亀兄……ねえ亀兄ねえ亀谷さん」

いくら呼んでも揺らしても返事がない……

「亀……谷……さん」

私は泣いていた……

涙が止まらなかった……

「また亀谷と里中か」

お前らいくらやっても覚ええないな」

「「すいません」」

「第17位」

6点かくと……………」

「地震やみんな気いつけや」

直行が聞く。

「え〜と…ぼくん家」

「」「」「」……「」「」「」

またみんな哑然とする。

「なんだよ〜」……
誘拐されたかと思った〜」

太一が言いながら仰向けになる。

「なんでボクたち亀谷さん家にいるんですか？」

「あ〜それは……………」

オレはここまでの経緯を説明した。

「なんだそんなことかよ」

「怖がつて損した〜」

「まあいんじゃないね」

「そうですね」

「なんか何かだね」

みんなホッとしたみたいだ。

「オレじゃあ帰りますよ
仕事もあるし」

「ボクも」

「私も」

太一、直行、レベッカは立ち上がり部屋出てった。

「「「お邪魔しました」」」

3人声を揃えていう。

「欄ちゃんもう泣かないで」

「ゴメン……」

泣いてる欄ちゃんに声をかける雪。

「亀兄のせいなんだから謝りなよ」

オレのせいなのか……

「ゴメンなさい……」

一応謝るオレ。

「いや私の勘違いですから……」

時間がたつと欄ちゃんも泣きやんだ。

直行です。今は舞台の稽古がやっています。

今は一時半…

何故か二人は家でくつろいでいる……

「なあ二人とも仕事は？」

「今日、明日はないんです」

「雪も」

だからって……オレン家でくつろぐなよ……

「亀兄はあんの？」

雪がきいてくる。

「あゝぼくは三時から
だからもう出るけど…」

「あっそうなの…
行つてらっしゃい」

出る気はないんだね……

「お留守番は任せてね」

居座る気か……

まあいつか……

「んじゃゝ頼むね」

「はゝい」

元気な返事がかえってくる。

まあ何かおかしいけど……

オレは仕事に向かった。

「はいお疲れ様」

仕事が終わった。

今日は久し振りのドラマの収録。

楽しかった

「亀ちゃゝゝん
飲みいかへん？」

西田さんが声をかけてくる。

「あゝすいません行けせん……」

残念そうな顔する西田さん。

「ええやゝん共演してるんやし」

「すみせん…」

「まあええわ」

西田さんは楽屋に戻って行った。

オレも楽屋に戻った。

あっメール来てる。

雪からだ………

（今日ファミリーと飲み会やるから亀兄ん家で！！）

勝手に決めんなよ………

まあ今言ってもやるんだろうけどな………

どうせやるなら西田さん誘って行こつ。

）ドンドン）

「西田さん

亀谷です」

「なんや」

ドア開けないんだ……

「飲みいきませんか？」

「行けへんちゃうんか？」

「事情が変わりました」

「詳しく聞いてもいい事情？」

どこに食いついてるんだ……

「まあええわ

用意してるから」

「そんじゃ、ぼくも用意してきます」

「つきましたよ」

「ここ居酒屋ちゃうやん」

「そうですよ」

「絶対誰かの家やん」

「まあまあ」

こんなカンジに会話をしながらオレの家に近付いてった。

家に入ると……

かなり量の靴があつた。

どんだけ呼んだんだよ……

「おい亀谷かなり来てへんか？」

「けっこう来てますね」

入るしかないか……

「ただいま」

「お邪魔します」

そう言つて上がると居間に向かつた。

「お帰り〜亀兄」

「お帰り〜」

雪と欄ちゃんが迎えてくれる。

「西田さんも連れてきました」

「ヨオ」

手をあげながら陽気に振る舞う西田さん。

「おゝニシモン」

「来たんや」

周りのファミリーは騒ぐ。

でも……………雪だけはイイ顔はしてなかった…

「ボーツとしてないで亀兄も飲もうよ」

欄ちゃんに引つ張られて座るオレ。

「直行とレベッカはこれないんだって」

「そうなんだ…………アイツら大変だな…………」

ニシモンも芸人の集団の真ん中に座った。

「雪ちよつと酔い覚まして来る」

いきなり雪はそう言い部屋から出て行った。

「ねえ欄ちゃん雪そんな飲んだの？」

「そんなに飲んでないと思うよ……」

雪なんか西田さんを避けてるみたいだ……

あれから一時間くらいしたが雪は戻ってこない……

「雪遅すぎるでしょ」

芸人の中の誰かが言う。

「ぼく様子見て来ます」

オレは立ち上がり部屋を出ようとした。

「オレも行く」

西田さんが立ち上がり言う。

「えっ……でも」

「でもなんや？」

「何でもないです」

「ほな行くぞ」

二人で様子を見に外にでた。

しかし雪の姿はなかった。

「いないですね」

「なんか心配なるわ探しに行くぞ」

西田さんはいつに無く真面目な顔で言う。

「分かりました

探しに行きましょう」

見つからない…

電話もでえへん…

嫌な予感がする…

オレのせいなんやるか……

この前怒鳴ったことを怒ってんのかな……

「亀谷なんとか連絡つかんか？」

こんな時に人に頼るなんて情けない自分がいる……

「そうだ欄ちゃんなら連絡つくかも……」

そう言っつて欄に電話し始めた。

頼む……何にも起きないで……

「西田さん今近くの公園にいる見たいです」

公園どこや？

「どこにあんねん？」

「わからないです」

あと吉伸さんも一緒だそうです」

なんで吉伸さん……

「わかった！！」

「ちよっ西田さん！？」

オレはひたすらに走った。

吉伸やけど……飲みに誘われたんやけど龜谷の家はどこや……

走ったはいいけど公園ってどこや？

「どこや……！」

住宅地の真ん中で叫ぶ。

（プルル）

こんな時に電話や

「もしもし！」

「あっニシモン」

欄か……

「なんや！」

「いや、公園の場所知ってんのかな？っと思って」

「おお、教えてくれ……！」

「ニシモンうるさいよ
えつと場所はね……」

「……おおきにな」

「んじゃゝ気をつけて」

欄が言つてた場所はけっこう近いな……

オレは全力で走つて行つた。

今私は公園のブランコに座つてる……
隣に吉伸さんがさっきまでいたんだけど……

（雪はまだ子供やな……
あとアイツも……）

そつ言つて公園から出て行つた……

子供ってどゆうことだろう……

吉伸さんの言っていることはよくわからなかった。
でも最近…ニシモンを避けてるの事実……
嫌いになった訳じゃない……
なんか複雑な気持ち……
どうすればいいかわからない……
どうすればいいの………

「見つけた!!」

雪を見つけた嬉しさから思わず叫んでしまった。
雪はビックリしていた。

「雪よかった」

オレは雪に近付いた。

「ニシモン………
の………バカ!!」

雪は思い切り叫んだ。

「誰がバカや！心配して来たのに！！」

「来るのが遅い！！」

「なんも言わず出てくからやんけ！！」

「避けてるのに声で言う分けないでしょ！！」

「だからって……」

…

…

…

…

…

…

…

…

…

三十分後……

「あゝニシモンのせいで喉も痛い」

「なんでオレのせいや」

「あゝあもういいよ……」

話しても無駄だった……」

さっきまでと違い寂しげに言っ公園から出て行くとする。

「待てや！……」

一週間後絶対こいよ!」

「行かないから……」

これでお終い

じゃ〜ね

西田さん……」

雪は公園から出て行つた。

いきなり静かになる公園……

なんか心がポカンとする……

(じゃ〜ね

西田さん……)

西田さん……か……

……

……

(プルル)

「はい……」

「西田さん

雪どうでした」

亀谷か……

「いや、どうにもならなかった……
帰ったわアイツ……」

「そうですかそれじゃ早めに戻って来てくださいね」

「ああ、じゃ、な」

電話を切ると涙出て来た。

ホンマにオレ涙もろいな女一人くらい……

くらい……じゃないな……

大切なやつ……

今でも……

「結局ぼくたち置いてきぼりだね…欄ちゃん」「そうですね…」

結局西田さんは帰ってこなかった……

それから二週間が過ぎた……

「クイズ・サプライズ〜ヒットパレード〜」

いつもと変わらず収録が始まる。

「早速行きましょう順位発表」

「第17位」

「8点獲得……」

山上太一さん

「じゃあー！」

太一は階段を上つてく。

「雪また最下位やで」

吉伸さんが雪に言う。

「……………」

「…………雪？」

「あつ…はい」

「そんだけボーツとしてるから最下位なんや席に行け」

雪は最近おかしい……

今日は……一時半には仕事が終わる予定……

今日は大事な日だけど……

ケンカしてるままだし……

このままだと別れるパターンかな……

別れたく無いけど……

お互い気を使って……

一緒にいても楽しくない……

みんなにバレないように……

誰にもバレないように……

それはもう疲れた……

「はいオケーです
お疲れ様でした」

「お疲れ様です」

みんな口々に言ってスタジオから出る。

邪魔にならないような所で話している人もいる。

「今日の雪は完璧に変わったな」

「うん元気ないカンジ」

「そう思うでしょ亀兄？」

やっぱり変だよな……

悩み事とかあんのかな……

「亀兄？」

「あっ……そうだね」

「亀谷さんもボーツとしてるんだな」

太一が笑いながら言う。

「疲れてるんですか？」

気を使ってくれる直行。

「まあ亀兄はいつものことですよ」

欄ちゃんはスラツと言う。

オレ普段そんな風に見えてんだ。

「西田くネタ作りもかねて飯食いにいかんか…」
井本が誘って来る。

「んゝ今日はあかんねん…悪いけど…」

「そうなん…でもいずれかは行くぞ」

「わかってるわ」

「そうか……」

オレは井本から離れ楽屋に戻った。

「西田さゝん

今日飯食いに行きませんか？」

「悪いけど用事あんねん…」

「あつそうですか…」

また今度にでも」

悪いな…

今日はめっちゃ大事な日やねん。

「ねえ雪」

今日ご飯行かない？」

欄ちゃんに初めて直接誘われた。

「うん行こう」

私は嬉しくて直ぐに了解した……

「じゃー今日の七時にいつもの所ね」

私は上機嫌になっていた。

仕事が終わって今は二時……

よし次の仕事って雨か……

外に出たら土砂降りで風邪も強い。

「傘壊れそうだな」

マネージャーの車で行こう……

そう思った時ちょうどよくマネージャーが来た。

「直行さん乗ってください」

「あーどうも」

仕事場に向かうまでの窓から見た外は東京とは思えないほど人はいなかった……

午後七時……

あゝこない……

やっぱり来ないのかな……

雨ドンドン強なって来るな……

「ハクシヨ

ン
チクシヨ」

寒い……

時間は戻って六時半……

「ゴメンねゝ亀兄」

「いいけどゝ風邪強いなゝ」

今は欄ちゃんと一緒に亀兄の車に乗っていつもの居酒屋に向かっていた。

「あれニシモンじゃない」

欄ちゃんが窓の外を指差す。

「何してんだろう…
傘壊れてるし…」

まあ…アイツは…勝手にしてることだし…
雪は…行かないって言ったから……

「よしついたぞ…」

ニシモン……
たぶん大丈夫だよね…

「「カンパ〜イ!!」「」」

あ〜つかれた〜

今はマネージャーさんに送ってもらってる。

「直行さんお疲れですね」

「そんなことないですよ」

実際つかれてるけど…

あれって……ニシモンさんだ……
何してんだろう？

(プルル)

電話だ。

「はいもしもし」

「なんですか亀谷？」

「仕事終わった？」

「終わりましたけど……」

「一緒に飯くわない？」

「いいですよ」

「じゃ〜いつもここで」

そう言うと電話が切れた。

亀谷さんと飯久しぶりだな〜

七時半……

「おまたせしました」

「直行おそいよ〜」

「いや〜すいません」

直行が遅れてやって来た。

直行も座り話しながら食べている。

「あれ直行飲まんの？」

「あつ車で来ましたから」

あれ亀兄も車じゃなかったっけ……

「亀兄も車だよね……」

欄ちゃんが小さい声で聞く。

「……………」

亀兄が固まってる。

「どうしよう…飲んじゃった…雪」

「なんで雪に聞くの？」

いきなり聴かれてビックリした…

「いや帰りはボクが乗せて来ますよ」

亀兄はホッとしたみたいでまた食べ始めた。

「そう言えばボクさっきニシモンさん見ましたよ」

「あつ私も」

「誰か待つてるみたいでした」

待つてる……

……

バカだ……

「直行そこまで連れてって！」

「えっ？」

直行はキョトンしていた。

「早く!!」

「はい！」

雪は直行の車に乗り込む。

あゝあかんぞ……

寒い……

雨やめへんかな……

（行かないから……）

やっぱり来ないんやな…

……もうちょっと待とう……

来るかもしれない……

「ありがと直行」

「うん気をつけて」

直行には全部話した…
付き合ってることも…

急がなきゃ…

ウチは全力で走った。

雨、風が強い…
こんな中待ってんの…

あともうちよつと……

……！

（ベチャ）

足がもつれた。

「あゝもう！」

ウチは痛めた足を引きずりながら歩いた。

あのバカの姿が見え始めた。

あつちはウチに気付いていない……

「ニシモン！」

ニシモンは周りを探し始めた。

「こつちだよ！」

「雪！！」

大きな声で叫ぶ。

周りに人はいない。

「遅いわアホ！！」

「来ないって言ったでしょ！！」

「結局来たやんけ！！」

「きたけど……」

「まあ来たからいいわ」

「ゴメン……」

「オレも悪かったわ……」

「……雨でぬれたけどこれ……」

アイツの手にはびしょ濡れの紙袋があった。

「ありがとう……」

「びしょ濡れじゃ嬉しくないよな……」

鼻をかきながら言う。

「いや…嬉しいよ」

正直ウチは照れた。

「ところで…なんでそんな泥だらけなん？」

「来る途中でこけちゃった…」

「ドジやな」

この一言にカチンときた。

「ニシモンのせいでしょ！」

「なんでやねん！」

「なんでも！」

「意味わからんわ！」

「もう！」

その場からいなくなろうとした。

「雪…足どうした？」

「なんでもない…」

「何でもないことないやろ」

そう言いながらウチの前に来る。

「のれや」

「……えっ」

背中を差し出すニシモン。

「いいから乗れ」

「いいよ…歩くから」

断って歩き出そうとすると…

「ほなお姫様抱っこやな」

と言いながらウチを持ち上げた。

「わかった！わかったから降ろしてよ」

結局はウチはオンブされることになった。

「背中びしょ濡れじゃん」

「当たり前やろ」

そんな会話をしながら行くあてもなく歩いて行った。

空には満月が見えていた。

「どうも井本です「ウチの相方顔デカいです」

「クイズ・サプライズ〜ヒットパレード〜」

（ワアアアアア）

雪や西田さんがいつもに戻った。
そして明るい収録が始まった。

「え〜今日のサプライズは最後にお知らせが二つあります」

「何ですか？」

「最後のお楽しみにです」

吉伸さんが何か楽しそうに言う。

何だろうな……

「では順位発表」

「第1位47点……」

……

……

……

……

……

……

……

「第13位13点獲得…

亀谷毅史さん」

「よし！」

なんとか勝った…

「第14位10点獲得…

上久保直行さん」

無言のガッツポーズする直行。

「15位8点獲得…

レベッカさん」

「やった〜」

喜ぶレベッカ。

いつもなら吉伸さん突っ込んでくるのに…
笑顔で黙ってる。

「第16位7点獲得…

里中欄さん」

「よかった〜」

「第17位5点獲得…

…

岩下雪さん」

「やった!!」

「あゝあゝヤベ」

喜ぶ雪と悔しがる太一。

「よしみんな座れ」

吉伸さんが言う。

「今日のお知らせはおバカな人達に関係があります

じゃあ最初のクイズいきます」

…

…

…

…

「今日のクイズはここまでですがお知らせがあります」

オレたちの方を見て…

「おバカ6人

起立!」

つて言っただけ誰も立たない…

「自覚ないんかい!

亀谷と太一、直行、レベッカ、里中に岩下」

「雪たちのこと」

「他におらんやろ

なせ立たせたかといいますと…

…

男子と女子グループ

それぞれ歌を歌ってもらいます」

「「「「「えっ」「」「」「」

歌？

「以上や詳しくは後ほど…」

「いやどゆことですか？」

「後で言っわ」

歌って？

「そしてもう一つは合宿を行います
その合宿にしか使えない金もありますよ
いくら持てるかはクイズも決めます」

マジかよ…

……

……

…

「はいOKです」

「今から合宿の所持金決めクイズ始めます」

みんなまたクイズの位置についた。

「よし行くぞ問題!!」

…

…

…

…

…

…

よかった〜

15サプライズ貰えた〜

「合宿には明後日行きます」

遅刻しないように」

合宿当日……

あゝ朝早いのはキツいな〜

「西田さん来てないっすね」

「すみませんウチの西田が…」

西田さんのマネージャーさんがプロデューサーに謝ってる。

「雪はギリギリセーフ」

パジャマだけだな…

「おゝすみません!!
遅れました!!」

西田さんが走って来た。

「西田!!遅刻すんな言っただやろ!!」

「すみませんでした!」

気まずい空気が流れる。

「まあええわ時間やし
行くぞ」

みんな飛行機に乗り込む。

目的地は何か知らないけど暑いところらしい。

合宿開催！！砂浜でクイズ！！

「クイズ・サプライズ〜合宿スペシャル〜」

（イエ〜〜）

お客さんがいないのでファミリーで盛り上げる。

「え〜と始める前に西田…」

遅刻の罰で10サプライズ没収」

「そんな〜」

（あはははは）

西田さんは木村アナにサプライズ紙幣を渡した。

「え〜早速クイズに行きたいと思います」

……

……

…

なんだよこのクイズ走りっ放しだよ。

このクイズは砂浜にある巨大なパネルの頭文字を使って答える。

そのパネルを走って取りに行って他の人の妨害をかわしながら回答席に行く。

西田さんは木村アナにサプライズ紙幣を渡した。

「えゝ早速クイズに行きたいと思います」

……

……

…

なんだよこのクイズ走りっ放しだよ。

このクイズは砂浜にある巨大なパネルの頭文字を使って答える。

そのパネルを走って取りに行って他の人の妨害をかわしながら回答席に行く。

はぁ疲れた…

「後3人抜けてたら終わりやゝ！！残つとるやつ飯抜きゝ！！」

えゝ！？

残ってる人から声上がる。

オレもヤベゝな…

「行くぞゝ問題！！」

………

問題聞いたけど…

ワカンネ〜!!

とりあえず走ったけど…

なに取ればいんだ…

「ドケ〜!」

叫びながら走る西田さん。
もうすぐそこに回答席だ。

「ヨッシャ〜!!」

ごっ…!」

(あはははは)

「井本〜ナイスタツクル!!」

西田さんは仰向けに倒れていた。

井本さんは悠々と抜けていった。

「痛〜な!」

ゆっくり立ち上がる西田さん。

でも立ち上がる頃にはクイズが終わっていた。

「クイズ終わったん?」

「終わりましたよ」

笑顔でいう木村アナ。

「オレの飯は？」

「ないですね…」

まあいきましようか」

西田さんとはとほと歩いて行った。

「オレらも行くぞ」

残りみんなも吉伸さんの一言で昼食会場まで歩き出す。

飯のお次は絵を書こう！？

いただきます！

クイズに正解した人は美味しいそうに昼食を食べている。

「吉伸さんオレ達も飯食いたいっすよ」

西田さんが言う。
すると

木村アナは立ち上がり

「5サプライズでランクアップできます」

（オオ）

飯抜き組から歓声上がる。

「5サプライズですよ」

みんな次々とランクアップしていく。

「あれ太ーランクアップしないの？」

「オレさっきのクイズでお金いっぱい落としちゃった…」

へこむ太一。

「しゃくないな。太一に飯食わせたるわ
すいませ〜ん

あれお願いします」

そう言つと店員さんが何かを持って来た。

「これは……

やだよ〜！」

（あはははは）

そりゃそつだよな。

青汁とヤギ汁じゃな〜

「どつちもやだよ〜」

と言いながら食べていた。

そつして昼食の時間も終わって行った。

また砂浜に来た。

「次に皆さんには絵を書いてもらいます
プロを読んで順位もつけます
下位5人は飯抜きです」

（え〜）

ファミリーから声が上がる。

絵か〜
頑張ろう。

皆スケッチブックを受け取って各自絵を書き始めた。

何書こつかな〜
海でいつか〜
簡単そうだし。

「太一何書くんや？」

吉伸さんがオレに聞いて来た。

「海を書こうと思います」

「お〜頑張れよ」

吉伸さんは他の人を見に行った。

よし！1位取るぞ！！

海って意外と難しいな

「亀谷さんうまく書いてま…」

ぼくは言葉を失った。

余りにも絵が……

下手だったから…

小学生くらいの絵かな…

海じゃツマンないかな……

あそこの岩場がいいかな

あっ……

レベッカ岩場に座ってるし…

いいやそのまま書きゃえ。

「何書こつかな」

岩場に座ってるレベッカを見つけた…

「何書いてるの？」

「あゝ欄ちゃん

海書こつかな」と思いまして
雪ちゃんも海みたいですから」

んじゃゝ私は……

あつちようどいいかも……

結果発表！！

「さあ皆さん書き終わりましたね

プロの先生を呼んで審査してもらいます

下位5人は飯抜き

一番いい絵の人には……

10サプライズ差上げます」

（おお～）

木村アナの説明でみんな盛り上がる。

「先生お願いします」

ちょっと小さいオジサンが出て来た。

「ヨロシクお願いします」

西田さんや井本さんをはじめ芸人さんが先生をいじり始める。

「おいお前らやめや！

この人はなあ日本のピカソ呼ばれるスゴい人なんやぞ！

ちんけなオツさんやけど」

こら～！！

芸人さんがここぞとばかりに前に出る。

「あはははは
ではいきましようか
最初は…」

…

…

…

「えゝ次は…誰やこれ？」
ほぼ真っ暗な絵だ。

「それぼくですね」

「井本なんやこれ？」

何だろう…

「西田の後頭部です」

「なに書いてんねん！！」

西田さんが叩く。

「次は…真っ黒の次は真っ青や…」

「誰ですかこれ？」

「ぼくです」

手をあげた。

「亀谷…なに書いたんや…」

吉伸さんは呆れているみたいだ。

「え〜と海です」

「絵心無しか！
次」

…

…

…

「次は…真っ茶色…誰や？」

「私です」

欄ちゃんか。

「なに書いたんや？」

優しい口調で言う吉伸さん。

「レベツカの後頭部です」

「アホか！」

「ぼくと一緒の考えじゃないですか！」

ニシモトの二人が突っ込む。

「まあええわ
次」

次の絵は……
オレが書かれてる……

「誰や？」

「あつオレです！」

太一かよ。

「絵を書いてる亀谷さんを書きました。」

あゝどうりでこっち見て書いてると思った。

「そうか……
次」

……
……
……

「あと二つです。」

「残り二つは意外といい絵なんだよな
この絵は誰や？」

「ぼくです」

直行うまいな

「この座ってる娘は誰や？」

「あゝ…………たぶんレベツカだと思います」

「なんでいんのや？」

「座ってたから」

…………答えになってない気がする…………

「そうか…
最後」

「雪です」

スゲゝ絵な気がする。

「おおゝ芸術なカンジがする！！」

太一を始めファミリー全員が言う。

そしてこの絵にも小さく人が二人書かれていた。

「この絵のやつらは誰？」

「うゝん…………誰だろう…」

おい！！

芸人さんがコケる。

「思い出した！

ニシモト達だ！」

「「呼び捨てかい！！」」

「ちょうど井本が後頭部書いてるときか」

あはははは

笑いが起きる。

「では先生審査ヨロシクお願いします」

「はい決まりました」

先生が言う。

オレは緊張してきた。

「では下位5名の発表をお願いします」

「一人目は……………」

井本さん」

「ええ!!」

そりゃそうたる!!

各々が言う。

「何がダメでしたか？」

「言わなくてもわかると思います」

「何でやねん！」

井本飯抜き

「続いて二人目」

「……………里中さん」

「うそ」

素頓狂な声を出していた。

「まあ理由は言わずとも」

里中飯抜き

「では3人目」

「え………」

高田さん

「いゃん!」

「四人目お願いします」

「んゝ信濃川さん」

「マジっすか!」

高田

信濃川飯抜き

次で最後か……

呼ばれないで……

「最後の一人は……」

「山上さん」

「えゝえゝ!!」

太一飯抜き……

「ちょっと待ってください
亀谷の絵はいんですか？」

吉伸さんが待ったをかけた。

そっだ！

という声も上がっている。

頼むよ

「豪快なカンジも受け止められますし…
私ファンですから」

おかしいだろ！！

みんなが立ち上がる。

「まあ先生の判断やしな
太一アウト」

「えっ！！」

よかった

太一にはワリイけど……

「それでは今度は1番よかった作品を選んでもらいましょう」

「……悩めますね
よしこれですね」

そう言つて先生が持ったのは……

……

雪の絵だった。

「雪？」

「雪スゲ〜！」

太一が背中をたたいて来る。

「やったじゃん！」

「すごいね！」

欄ちゃん、レベッカが抱き付いて来る。

「先生どこが決め手だったんでしょうか？」

「やっぱり絵に対する愛情でしょうかね
特にこの二人の人物にはスゴい愛情を感じます」

照れくさいな〜

スゴい照れる…

「雪泣くなや」

「え…いや…」

吉伸さんに言われて気付いた。
頬に涙が伝ってた。

「こんなに褒められたの始めてだから」

「泣くなよ〜オレまで泣けてくるやないかい」

吉伸さんはハンカチで涙を拭っていた。

この番組に出れてよかった……

「それでは皆さん夕食の時間で〜す
移動しましよ」

そうして一日目が終わった。

料理対決！！そしてトラブル…

二日目…

「合宿二日目は」

「クイズに答えて食材ゲット料理対決！！」

ワアアアア

お客さんはいないので自分達で盛り上げる。

……チーム分け……

オレは水色か……

欄ちゃんも一緒だけど……料理できるのかな？

………

ウチは黄色だ…

欄ちゃんとかと離れちゃったけどいつか…

.....

ぼくはピンクか……

朝田さんがいるし…

料理は大丈夫だろ…

「皆さんにはチームの中でクイズ組、釣り組、料理組にわかれても
らいます」

さあ〜釣りだ!!

「亀谷張り切ってるな」

「いや〜高田さん!釣りですよ!」

「わかつとるわ!」

今釣り組で釣りを教えてもらってる……

早く釣りたい。

「それじゃ〜各自頑張ってください」

「よし亀谷行くぞつておらん!!」

オレは早速釣りに行った。

「食材ゲット早押しクイズ〜!!」

ぼくクイズ苦手なんだけど代表でいいのかな…

「さあ頑張りましたよ上久保さん」

レベッカが笑顔で声をかけてくれる。

「うん」

まあ頑張ろう!!

「問題!」

…

…

…

んゝ無理だな…

「わかった?」

レベッカが小さい声で聞いてくる。

「わかんない…」

食材取れないかも……

「ヤバいね」

焦ってるようには感じない声だった。

でも落ち着く声だ。

「次の問題……」

……

……

……

……

…

結局ニンジンとお米1合しか取れなかった。

「どうしよう」

「料理作れないよ」

今は二人で反省中…

「怒られるかな？」

「大丈夫でしょお米あるし」

「んゝ謝ってこよう」

「魚もあるしね」

二人で米とニンジンを持って戻っていった。

クイズが終わった。

ウチらは料理の食材を持って調理場まできたけど……

「お疲れ様」

「何取って来た？」

アイドルの料理組が笑顔で聞いて来た。

「ジャジャ〜ん

これで〜す」

「おゝカレーはできそうだね」

「料理頑張っ〜」

後はただ見てればいいだけだと思ってた。

「クイズ組集合〜!!」

吉伸さんが集合をかける。

「クイズ終わったからってのんびりしてられへんで
山菜取りに行つてらっしゃい」

え〜!!

「え〜じゃない!!
なに樂をしようとしてるんだ
行つてこい!!」

みんなはあまり気が進んでいなかったみたいだった。

いや〜釣れるな〜

「釣れへんな〜
亀谷どうやったら釣れんねん？」

高田さんは全然釣れてなかった。

「いや〜経験ですかね」

「悔しいわ〜」

それから1時間……

「戻りまゝす」

スタッフさんの声で釣り組が戻り始めた。

「0匹や」

「ぼくは17匹ですね」

これは胸はって帰れるなゝゝ

できたゝ

「いやゝ食材もいっぱいあったしよかったです」

よかったなゝ

食材あつて。

「えゝ今から試食して最下位のチームは野宿してもらいます」

えゝえゝ!!

「じゃあ食べて来ます黄色から」

……

「……まあ食べるな……」

次は私達水色チームに来た。

「ああ……里中はじめ料理できるメンバーじゃない気がするな……」

「そんなこと」

「ない」

「ですよ」

「なんで息ぴったりやねん!!」

吉伸さんは座って作りたてカレーを食べ始めた。

「なんやこれは？」

「カレー」

「です」

「けど」

「色だけな…味みしたか？」

「して」

「ない」

「です」

「」「けど」「」

「もうええわ……」

そう言ってピンクチームに向かって行った。

「いやゝただいまゝ」

「お帰りゝ」

「亀兄ゝゴメン」

欄ちゃんがいきなり謝ってきたからドキッとした。

「え………な…な…何かしたの？」

「料理対決負けちゃったゝ」

「えっ！！」

ってことは………

………

どゆこと？」

欄ちゃんは笑いながら

「野宿ってことです」

あゝ野宿か………

………！！

「笑い事じゃないよ！」

「だからゴメンって！」

「魚班集合ゝ！！」

吉伸さんが集合かける。

「ちょっと行ってくる
後で詳しく聞かせてね」

そしてぼくは吉伸さんところに向かった。

吉伸さんは小さい声で集まったメンバーに言う。

「雪がいなくなった…」

「「「えっ!?!」」」

「静かにしろ!!
みんなには知らせんように……
コッソリ探してくれ」

「わかりました」

高田さんがテレビでは見せない顔している。

「行くぞ」

高田さん、太一、オレは雪を探しに行った。

西田と岩下

(ぽちゃん)

「……ばか……」

(ぽちゃん)

私は水に石を投げていた。

なんだよアイツ……

男らしくねえ……

「……ばか……」

(ぽちゃん)

一時間前……

「いやゝしんどい……」

「なかなか険しいですね」

西田と信濃川の相方の庄屋が話しながら進んで行く。

吉伸に言われて山菜を取りに来たが険しくて進むのが大変みたいだ。

「そう言えばデート誰誘います?」

「あゝそんなもんあつたな」

西田は迷っていた。

（あれやつたろうかな…

吉伸さんには怒られるかもしれんけど…）

「で誰にするんです?」

庄屋は笑いながら聞く。

「女子かお前は！小さいこと気にして！」

「いやゝでも実際楽しみでしょ」

庄屋はホントに楽しそうだ。

「西田さんだと雪あたりですか？」

（なんで知ってんねん!？）

「いつも中いいで

「ないわ！！雪なんてデート誘うのに論外やろ！！」

西田が言い切った後…

「ばか！！」

そう声が聞こえて何かが走ってく音がした。

「何か言いました」

「……………」

「西田さん」

「悪い庄屋…」

「一人で行ってくれ」

「ちよっ！西田さん！！」

西田はいきなり走り出した。

「ばか！！」

ウチは西田さんにそう言っていると走り出した。

「雪！！」

西田さんは追いかけて来た。
でも体力はウチのほうがある。

「……………ゆき！……………ゆき……………き……………」

ドンドン声が小さくなって行く。

「ハアハア……………マジばか……………」

気がつけば西田さんは見えなくなっていた。

論外ってなんだよ……………」

雪はアンタの…
アンタの……

もういいや…

「……………」

迷ってしまった。

「アアゝもう最悪!!」

全部アイツのせいだ。

「……………だよね」

レベッカの声が微かにした。

「レベッ……………」

足を滑らせて坂から滑り落ちてしまった。

「痛ゝ!!」

けっこう落ちたな…

「レベッカゝ!!
レベッカゝ!!」

聞こえないみたい…

最悪だよ…

ウチが坂を登ろうと立ち上がろうとしたとき…

痛…

足ひねったみたい…

これじゃ動けないよ…

「いないですね…」

「戻ったかも知れませんか」

「太一みてきてくれ」

「わかりました」

太一はみんながいる場所に向かった。

「亀谷…」

バラけるぞ

オレはあっち

お前はそっちや

太一が来たら行くぞ」

雪…：…大丈夫かな…

「亀谷心配すんな

大丈夫や

絶対見つけたるから」

高田さんが気を使って声をかけてくれる。

そして、太一が戻って来た。

ハアハア……どこにもおらん……

あと五年若かったら追いついたのに……

年はあかな……

（ポチャン）

なんか音がするな。

（ポチャン）

こっちからや…

（ポチャン）

「……………馬鹿」

雪の声や！

オレは声のする方に走った。

「うおー！！」

坂から滑り落ちてしまった。

「いてっ」

坂だとは思わなかった。

「西田さん？」

ビクリしてる雪。

西田さんってヨソヨソしいな。

「行くぞーみんな心配しとる」

立ち上がるうとしたとき

「いて！」

足に激痛が走った。

ヤベエ足ひねった…

「雪動けるか？」

雪は首を横に振る。

「お前もか…」

結局ピンチだな…

暗くなってきたな。

腹減ったな…

待っててもしょうがないな……

立ち上がり助けを呼びに行こうとしたとき

「いっ！……」

激痛が走った。

でも行かんと…

「どこ行くの？」

「助け呼ばないとあかんやろ」

「足痛いんでしょ」

「でも行かんとあかんやろ」

雪は黙り込む。

足を引きづりオレは進んで行く。

「ニシモン！」

「まあ待つてろ！」

頑張って落ちて来た坂を登って行った。

いね〜な…

もう六時半だし…

「おい亀谷！」

声のした方を見ると…

「高田さん！」

いましたか？」

「まだ見つかつたらん」

申し訳なさそうに首を振る。

「そうですか…」

暗くなる前に見つけましょう」

二人でまた探しに行こうとしたとき…

「……………か…れか……………誰か」

「西田さんの声じゃないですか？」

「せやな…どこや」

周りを見渡しても姿が見えない。

「西田さんどこですか…！」

「どこや…！」

「わからないですよ」

「右の方で倒れてるわ!!」

右の方には……

確かに倒れてた…

「何したんですか!？」

「いいから雪のとこ行くぞ」

「見つけたんですか？」

「だからおぶれ

案内する」

オレは西田さんをおぶって雪のところに向かった。

西田さんは泥だらけで足がヒドく腫れていた。

びっくりサプライズ！？そして合宿終了！！

「もうすぐや」

西田さんがオレの背中と言っ。

「亀谷降ろせ

この先や

オレが先頭で案内する」

西田さんは足を引きずりながら歩いて行った。

「にし……」

西田さんを止めようとしたところを
高田さんに止められた。

「高田さん？」

「……………」

高田さんは黙ったままだ。

「ここの坂を降りたところや」

坂ってほとんど直角じゃねえか……

「雪！！

連れて来たぞ！！」

「ニシモン!!」

雪が座っていた。

けっこうな高さだな。

でも助けに行かないと……

怖え

「今行くからな」

そう言つて高田さんは滑り降りて行つた。

「あゝ年にはキツいな」

「芸歴違つても高田は年上よな」

雪を背負つてゐる高田さんは汗だくだ。

「大丈夫ですか？」

「なんとかな」

息ぎれもしている。

「おつと……」

亀谷、西田さん先行つといてください
靴紐が……」

「はい」

「早くこいよ」

高田さんは靴紐を結ぶために雪を降ろした。

「高田さん大丈夫？」

「なあ雪……」

高田さんがゆっくり近付いてくる。
耳元に顔を寄せて来た。

「お前さ……」

ささやくように言ってくる。

「西田さんと付き合ってるやろ」

「なん……」

高田さんは顔を離して

「まあ答えんでもいいわ
でも薄々みんな感づいてるで」

そう笑顔で言うと言私をおぶってまた歩き出した。

「なんで西田がおぶられてくんねん」

吉伸さんは呆れていた。

森のほうから

「おまたせしました
雪のご到着です」

笑顔で岡田さんがやって来た。

吉伸さんは雪が帰って来て
ホッとした様子だった。

「ん…お前ら足怪我してるやん
おい手当てするぞ」

二人は吉伸さんに連れて行かれた。

「お二人はシャワーして来てください」

スタッフさんはオレ達をシャワーのある部屋に連れて行った。

そして部屋を出る間に

「あつ飯無しで次の収録ですから」

「えっ」

「ワアお」

ふざける余裕のあるリアクションの高田さん。

「飯なくても大丈夫なんですか」

「亀谷」

高田ちゃんは芸人ですからね
飯くらいなくても平気や」

芸人さんってやっぱりスゲ〜な。

「んじゃ亀ちゃん先行くで」

「よし亀谷も高田も来たな
後は西田と雪か…」

後ろでみんな雑談している。

「亀谷さん飯のときどこ行ってたんですか？」
「そうですよ」

太一と直行が聞いてくる。

「散歩」

「収録中に何してんすか？」

「いや……」

オレが言葉に詰まってるとき……

「はい〜おまたせしました!!
ニシモン登場です!!」

西田さんが雪と一緒にやって来た。

二人とも松葉杖だ。

なにがあつたんすか？

ファミリー全員が聞く。

「まあアクシデントやな」

笑つてごまかす吉伸さん。

「よし行くぞ

早抜け告白クイズ〜!!」

(…ワアアアアア)

突然切り出したから、みんな盛り上がるに盛り上がらなかった。

「どつしたんや盛り上がれや〜
行くぞ〜

問題」

……

……

……

…

残り6人か…

レベツカは強制的に中田さんとデートだからな…
リーダーも決まったからな…
あと一つだけか…

「行くぞ〜問題」

………

………

…

「正解！

直行だれや？」

「え〜

朝田さんお願いします」

（え〜〜）

「私が、え〜だよ！」

オレもビックリだよ。

「さっきの料理美味しかったです」

「吉伸さん……
いいの？」

「ええよ
オバサンやし」

「ちょっ
……」

「じゃあ直行くんお願いします」

（フウ~~~~~！）

「次行くぞ
問題」

……

……

…

「残り3人です」
「あら亀谷に太一はわかるけど……
西田も」

「ボタンがね
おかしんですよ」

「そんなことないやろ」

問題」

……

…

「おゝ亀谷ゝ間違い」

（ピンポン）

「おゝ太一！

答えは？」

「切り札！！」

「正解」

太一が抜けて後二人…

西田さんはボタンの横をたたいて押してる振りをしている。

何してんだろ……

「太一だれに？」

「雪に」

「えゝウチ

動きづらいのに…」

松葉杖で頑張って中央にくる。

「え」

「ちゃりゝスでお願いします」

「ちゃりゝスでごめんなさい」

「あら」

「そついいながらみんなところに行く。」

「残り二人

「亀谷と西田か

「西田何してんねん」

「ボタンが…」

「問題」

……

…

（ピンポン）

「西田さんに押し負けた……」

「福岡県」

「西田ゝゝ違う」

（ピンポン）

「亀谷」

「山口県」

「……………正解」

「よし」

西田さんに勝ちやった。

「亀谷だれに？」

「えゝえゝゝ」

欄ちゃんに」

緊張するな……………

「わたしかゝ」

欄ちゃんが目の前にいる。

ヤベゝ意識しちゃうな……………

「告白をどうぞ」

「えゝぼくの心の中に晴れをください」

……………言えた。

けど返事くるまでまだドキドキする…

「あのゝ意味わからないのですね」

お遊びだけど意外と傷付くもんだな。

「いらつしゃい」

芸人さんが迎えてくれる。

「欄ちゃん

8連敗やな」

田中さんが笑いながら言う。

そしてみんなは最後に残った西田さんを見ていた。

「さあ西田く最後やぞ
だれや？」

「……………雪で……………」

松葉杖の二人つてことかな。

「えっ…………いやいや…………ニシモン…………？」

雪ビックリしすぎだろ…………

「西田マジでか？」

吉伸さんもなんか焦ってる。

「吉伸さん……」

オレは爆弾落としますよ」

西田さん何かカッコいいこと言ってる。

「そんなら落とせや!」

なんかありそうなのはわかるけど……

「男やな」西田さん」

高田さんが笑顔で言っている。

「高田さん何あるかわかるんですか?」

「まあ見てればわかるやろ」

笑顔のまま言う。

なにがあんだろ……

雪は吉伸さんに引っ張れて中央にやって来た。

「西田いくぞ」

告白どうぞ!」

「え」とね私ニシモトのシッコ担当

西田敏文はモデルの岩下雪さんと……」

黙ってしまつ西田さん。
隣でうつむいてる雪。

「付き合っています!!」

えええええ!!

全員が叫ぶ。

「マジですか？」

みんなが中央にいる二人に駆け寄る。

「マジです」

西田さんは答える。

「雪ホントに？」

「……………」

黙って頷く雪。

えええええ！！

「みんな一回戻りましょう」

吉伸さんがみんなを落ち着かせる。

「えゝ私は前から知っていました」

吉伸さんが話はじめる。

「こんな形で言うとは思いませんでした。
そして皆さんに相談があります。

これをオンエアしていいと思うやつ手を上げてください」

(……………)

みんな黙ってる。

「オンエアはやっぱりキツいか…
このこ

「いいと思います」

オレは思わず言ってしまった。
二人が暗い顔してたから……

「オレもいいと思うで
二人とも年は離れてるけど、しっかりしてるし」

「私も」

「オレも」

「ボクも」

「わたしも」

欄ちゃん、太一、直行、レベッカも続いてくれる。

「ボクもいいと思いますよ」

井本さんも。

「まあ、いんじゃない」

「いいと思います」

「もうまんたいよ」

「問題ないってことです」

「いんじゃないっすか」

みんな賛成してくれる。

「みんな……ホンマに……ホンマに……ありがとう……」

西田さんが泣き出す。

「泣くなよ」

みつともない」

吉伸さんが肩をたたきながら言う。

「後は事務所次第ですね」

高田さんが言う。

今日の高田さんカッコいい。

「松本工業側は大丈夫です」

ニシモトマネージャーさんが言う。

雪のマネージャーさんが電話している。

「……私からもお願いします……
放送を……」

ダメな雰囲気が出ている。

その雰囲気は断ち切るかのように吉伸さんが動き出した。

「そこをなん……あつ」

「もしもし吉伸です」

電話を奪った。

「……………」

喋ってる見たいけど声が聞こえない。

少し時間が立って電話を切り戻って来た。

「で……どうなんですか？」

「……………あかんかったわ……………」

吉伸さんが残念そうに言う。

「でも絶対認めさすから」

「ありがとうございます…
オレ達のために…」

西田さんが泣きながら言う。

「だから泣くなっちゅーねん」

「吉伸さんありがとうございます」

雪が照れながら言う。

「あのーすいません
一応ダメだったときのために…
欄ちゃんに告白を」

スタッフさんが申し訳なさそうに言うてくる。

「なんでやねん!!」

「おかしいでしょ!!」

ニシモトの二人が切れ気味に言う。

「まあ落ち着けや二人とも……
これも芸人としての仕事や」

吉伸さんが二人に言った。

「まあ吉伸さんが言うなら」

「すみませんお願いします」

……

……

…

そうして合宿は終わった……。

木村です。お酒の飲み過ぎ体に悪いですよ。

一週間後……

「亀ちゃん

ドラマの仕事よ」

「マジですか!？」

「そうよ」

ヨッシャゝ久し振りのドラマだゝ

「しかもレギュラーよ」

これもサプライズのおかげだな。

台本は今日中に来るらしい。

みんなに報告したいけど…サプライズの収録は今日はない。

他の仕事が入ってるから。

「それじゃ亀ちゃん

遅れないようにね」

(ぴ)

マネージャーとの電話を切った。

今日はサプライズに行けないんだな……………

「クイズ・サプライズ〜ヒットパレード〜」

（ワアアアアア）

収録が始まった。

今日はみんな他の仕事があるらしくオレと欄ちゃんしかいない。

「今日はおバカ6人組は二人しかおりません
つまりコイツらが入らないチームの優勝です」

「ちょっと頑張りますよ」

収録は進んで行くけど……………やっぱり寂しい……………

「優勝はピンクチーム!!」

（ワアアアアア）

「おい太一に里中！

答えれへんのはいつものことやけど

今日は元気ないぞ!」

……だつて……

「しっかりしろや
ただせさえアホなんやから」

「はい」

……

…

収録が終わった。

「カット」

今日のオレの撮影は終わった。

久しぶりのドラマは楽しいな。

もう九時か…

……一人で飲もう……

タクシーでみんなで飲んだときの店に来た。

「いつらっしやいませ」

一人でカウンターについて注文する。

ドラマ楽しかったな……
でも……寂しいな……

まあ仕事だし…しょうがないか……

「おまたせしました」

店員がビールとおつまみを持って来た。

一人で飲む酒はあんまり美味しくない…

そんな事を考えながら、ただ飲んでいた。

「んじゃー私たち帰るけど…欄ちゃんどうする？」

「まだいるよ」

「飲みすぎないようにね」

手を振りながら帰っていくファミリーの女の子たち。

カウンターに移動しようかな。

私は今いつもの居酒屋にいる。

今日はこの前の事を反省してあんまり飲んでない。

個室からカウンターまで移動してる途中に…

「んーんー」

亀兄がいた。

亀兄が顔を真つ赤にしカウンターで酔っている。

「亀兄？」

「んゝ欄ひゃん？」

かなり酔ってるみたいで呂律が回ってない。

「ろうしてここひいりゆの？」

なに言ってるか全然わからない……

「亀兄けっこう飲んだでしょ？」

「れんれん」

たぶん……全然って言ったんだと思う。

「んゝ欄ちゃゝん」

笑顔で見て来る。

亀兄の隣に座った。

「亀兄が酔っぱらったとこ初めて見たよ」

「んゝしょう？」

酔っれるつもひはないける」

ギリギリわかるくらいだな……

「……」

二人の間に沈黙が流れる。
気まずい……

なんか話してくれないかな

そう思いながら亀兄の方をチラッと見ると……

「……ZZZ」

寝てるし……

酔っ払いのお世話って大変なんだね……
私いつもこんな感じなんだね……

「すみませんお勘定お願いします」

私は亀兄の分も払った。

「亀兄行こう」

ゆすつても起きない。

しょうがないな……

「よいしょ」

肩で亀兄を抱えて歩き店をでた。

重いな

流石は男の人だな

……にしても重い。

タクシーを止めて乗った。

「どちらまで？」

……亀兄ん家から行かなきゃダメだから……

亀兄ん家に行ってもらうと言った。

……亀兄もこんなに酔う事あるんだな

グッスリ寝てるし……

寝顔けっこうカッコいいいつも笑顔なのに寝てるけど真剣な顔に見える。

「欄ちゃん……」

亀兄が私の名前を呼ぶ。

「なに？」

……寝言か」

寝言で私の名前ってどんな夢みてんだろ？

「つきましたよ

三千七百円になります」

私戻ってるギリギリのお金だ……
どうしよう私ん家まで行けないじゃん……

「どうしたんですか？」

「なんでもないです」

お金を渡してタクシーを降りた。

「どうしょ……」

とりあえず亀兄を中に入れよう……

引きずりながら亀兄をベッドまで運んで行く。

「フウ……」

じゃあね亀兄」

歩いて帰るかな………

「ん」

!!

「な……………に？」

亀兄が私の腕を引つ張り隣に寝せた。

「ちょ……………亀兄？」

慌てて起き上がるとしたら…………

「え……………」

もう……………」

抱き付いて来た。

「亀兄起きて」

起きる気配がない…………

どうしよう…………

「欄ちゃん……………」

亀兄に名前を呼ばれると……………まあいつか……………って思っちゃん……………

私は意識が遠くなるのを感じた。

木村です。お酒の飲み過ぎ体に悪いですよ。(後書き)

ちょっと更新遅れます(TOT)

どうもレベッカです。私最近CMの仕事増えたんです。

「んっ………えっ!!」

オレは朝起きたらビックリした。
だって隣に欄ちゃんが寝てたから……

「なんでいるんだろ……」

不思議に思いながら料理をしにキッチンに行った。

簡単なのでいつか……

オレは鼻歌を歌いながら料理を始めた。

「そっぴゃあ…オレ飲んでた後の記憶がねえや」

何してたんだっけ？

そんな事を考えてる間に料理ができた。

「いただきます」

飯食ったらドラマの収録だ。
急ごう………

………

…

「ご馳走さま」

欄ちゃんの分も用意してこう。

「……………あれ？」

なんで私ここにいんの？

何故か私は亀兄の部屋にいた。

なんで？

（グー）

……………お腹空いたな

とりあえず起きて、リビングに行った。

「あゝスゴい」

ご飯とかが用意されてラップがかけられていた。

「亀兄料理出来たんだ」

私は座ってご飯を食べ始めた。

「………しょっぱい………」

味付け間違えたんだな……

今度料理教えてあげようかな

お皿を洗いながら、亀兄の家を見回した。

この前来たときと、あんまり変わらないな……！！
もう二時になっていた。

仕事に遅れる！！

急いで亀兄の家を出て打ち合わせに向かった。

「お前には事務所をやめてもらう」

オレは肩を叩かれながら言われる。

「そ……そんな……」

「明日からこなくていいから

それじゃな」

そう言ってアイツは部屋を出て行った。

オレは誰もいなくなつた部屋で泣き叫んだ。

「チクショーツ!!」

「はいカットOKです」

「おつかれさま〜亀ちゃん」

今日もドラマの撮影がしている。
芝居は楽しいな〜

「今のであと半分ね〜」

マネージャーが台本を見ながらオレに言う。

「にしても、よく台詞を覚えるわね〜」

「仕事ですから」

「ならサプライズで、もっとしっかり答えなさいよ!」

背中を思い切りたたいて言った。

「亀谷さんスタンバイお願いします」

「はい

それじゃ〜行って来ます」

「頑張つてね」

オレはセツトの上に立った。

「吉伸さんどうするんですか？」

「心配するなや」

女子グループはもう呼んであるんやから
今日からプロジェクトスタートや」

驚きファミリーの新しいステージが幕を開けようとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7689h/>

クイズ・サプライズ～驚きファミリー長男の亀です～

2010年10月14日22時32分発行